

私たちは、どんな道を歩いてここまで来たのでしょうか。人間の発達は、長い旅路だと思います。生まれて間もなくはクルマで運んでもらって、子どもは車窓から世界をながめているだけかもしれません。しかし、そうではあっても世界をながめ、感じ、そしてもっともっと外の世界を知ろうとするようになっていきます。クルマのなかではありますが、自分の足で歩くための練習もはじめることでしょう。

やがて、車中ではつまらなくなって地面に降り立ったならば、そこからつづく道はけっして平坦ではありません。やがて山道にさしかかり、汗水流して上り、ときどきは歩みをとめざるをえず、それでも喘ぎつつ上り、やっとの思いで踏み出した最後の一步から、急に新しい景色が開けてきます。その高原の道は、しばらく美しい景色を楽しませてくれるのですが、何か物足りないものを感じはじめたときに、また立ちはだかる峰が見えてきます。そしてまた、喘ぎつつ上るのです。

このようなことを何度くり返してきたのでしょうか。平坦ではない道があり、また容易な道ではあっても思わぬところでつまずいて、心が折れてしまうこともありました。でも、そうであるからこそ、負けない強い心を少しずつ自分のものにすることができたのです。

*

思い返せば、この長い旅路には、いつも同伴者がいました。本当にしんどいときだからこそ、その人の存在が必要であり、その叱咤激励しつたげきれいが一步を踏み出させてくれたこともあります。ひとりでながめるだけではつまらなかったろう景色を、いっしょにながめたからこそ、「美しい」と感じることもできたのだと思います。しかし、わけがあってひとりで歩きたくなることもありました。そうしていると、また新しい同伴者がほしくなったりするのです。

この旅路に一応の地図はあるのですが、どう歩いたらよいかはみえてきません。でも、行きつ戻りつしながら、ある時期から自分で地図が描けるようになってきたと思います。これから先の人生を、自分らしい地図に導かれながら、歩いていきたいものだと思います。

この旅路は、けっして高みに上ることが目的ではなく、見渡す限りのこの世界を、一度だけの人生において、深呼吸するように自分の心に吸い込むためにあるのではないのでしょうか。

*

さあ、その人生の旅路、そして人として生まれて人間になりゆく発達の道すじにおいて、私たちは、その道を歩きはじめた小さな子どもたちのどんな同伴者になれるのでしょうか。ともに、その旅への扉を開いていきましょう。



ひとりで探検してみたいが、その道はさびしくて不安。だから、水筒の紐を噛んで歩こう。3歳児